

# 1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和5年12月)

野菜振興部 調査情報部

## 【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は12万678トン、前年同月比96.2%、価格は1キログラム当たり257円、同108.1%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万9555トン、前年同月比93.8%、価格は1キログラム当たり234円、同111.4%となった。
- 2月は、各産地、各品目とも潤沢な出荷を維持し、平年並みかやや下回る価格になると予想される。

## (1) 気象概況

上旬は、全国的に天気は数日の周期で変わり、本州付近は高気圧に覆われる日が多かったため、旬降水量は、北・西日本日本海側と東日本太平洋側でかなり少なく、北・西日本太平洋側と東日本日本海側で少なかった。旬間日照時間は、北・東・西日本太平洋側でかなり多く、北・東・西日本日本海側で多かった。旬平均気温は、期間の後半を中心に大陸からの寒気の流れ込みが弱く、日本の北を低気圧が通過して暖かい空気が流れ込んだ日もあったため、北日本で高く、東・西日本では平年並だった。

中旬は、本州付近を中心に、16日頃までは前線を伴った低気圧が繰り返し通過したため、曇りや雨または雪の日が多く、気温は平年を大きく上回る日が続いた。一方、17日頃からは冬型の気圧配置が強まったため、48時間降雪量の日最大値が、北海道留萌（19日に105センチメートル）で観測史上1位の値を更新するなど、北・東日本日本海側を中心に大雪となった所もあり、強い寒気の影響で全国的に気温が平年を下回る日が多かった。旬降水量は、西日本でかなり多く、北日本と東日本で多かった。旬間日照時間は、北日本・西日本と東日本太平洋側でかなり少なく、西日本日本海側の旬間日照時間平年比は47%で、1961年の統計開始以降、12月中旬として1位の寡照となった。

東日本日本海側では平年並だった。また、旬平均気温は、東日本・西日本でかなり高く、北日本では平年並だった。

下旬は、期間の前半は、冬型の気圧配置に伴って強い寒気が流れ込んだため、全国的に気温が低く、48時間降雪量の日最大値が石川県輪島で観測史上1位（23日に60センチメートル）の値を更新するなど、北・東・西日本日本海側で大雪となった所があった。期間の後半は、冬型の気圧配置が緩み、北・東日本太平洋側を中心に高気圧に覆われて晴れて気温の高い日が多かった。旬降水量は、東日本日本海側でかなり多かった。一方、西日本と北日本太平洋側で少なく、北日本日本海側と東日本太平洋側では平年並だった。旬間日照時間は、北・東日本太平洋側でかなり多く、東日本日本海側と西日本で多かった。一方、北日本日本海側では平年並だった。旬平均気温は、北・西日本で低く、東日本では平年並だった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り（図1）。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本						日本海側 太平洋側			日本海側 太平洋側
東日本						日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側	
西日本									

資料：気象庁「12月の天候」

1 平年を上回る水準			
2 平年並み			
3 平年を下回る水準			

## (2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、

入荷量は12万678トン、前年同月比96.2%、価格は1キログラム当たり257円、同108.1%となった（表1）。

表1 東京都中央卸売市場の動向（12月速報）

品目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg) の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	120,678	96.2	94.7	257	108.1	110.8	242	254	272
だいこん	10,885	99.1	97.1	70	104.6	114.9	67	69	72
にんじん	8,250	96.0	95.9	138	116.9	117.9	137	134	142
はくさい	15,064	98.3	96.1	44	105.0	111.3	39	48	46
キャベツ類	13,583	101.9	98.9	79	115.0	119.7	86	85	68
ほうれんそう	1,736	107.9	114.5	425	93.6	90.9	435	443	401
ねぎ	5,512	91.7	94.7	372	127.6	125.8	399	354	367
レタス類	6,308	90.6	86.3	237	126.5	131.2	226	247	237
きゅうり	4,079	104.9	99.2	442	89.1	98.7	356	393	594
なす	1,337	106.3	103.3	424	102.5	90.7	437	412	426
トマト	4,674	102.8	96.7	415	100.7	106.0	498	427	344
ピーマン	1,749	110.3	106.2	403	82.7	97.4	375	417	418
さといも	1,449	88.0	91.4	371	117.9	111.4	326	359	402
ばれいしょ	7,542	94.4	95.2	119	98.2	89.1	125	116	116
たまねぎ	7,148	75.2	75.0	192	178.2	172.0	196	194	185

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格が堅調な動きとなり、前年、平年とも2割近く上回った（図2）。

葉茎菜類は、ねぎの価格が、関東産の出荷が追い付いてきた中旬以降落ち着いたものの、それまでの高値が残る展開となり、前年、平年とも2割以上上回った（図3）。

果菜類は、ピーマンの価格が、中旬以降底上

げとなったものの、高めに推移した前年を2割近く下回り、平年をわずかに下回った（図4）。

土物類は、たまねぎの価格が、数量不足から堅調な推移となり、前年を8割近く上回り、平年を7割以上上回った（図5）。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 にんじんの入荷量と卸売価格の推移

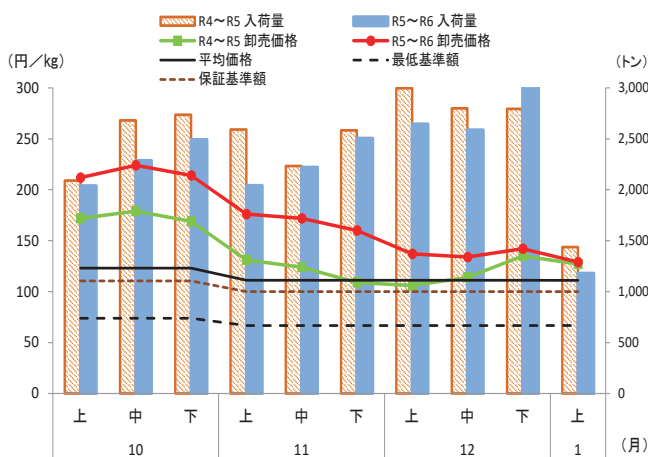


図3 ねぎの入荷量と卸売価格の推移

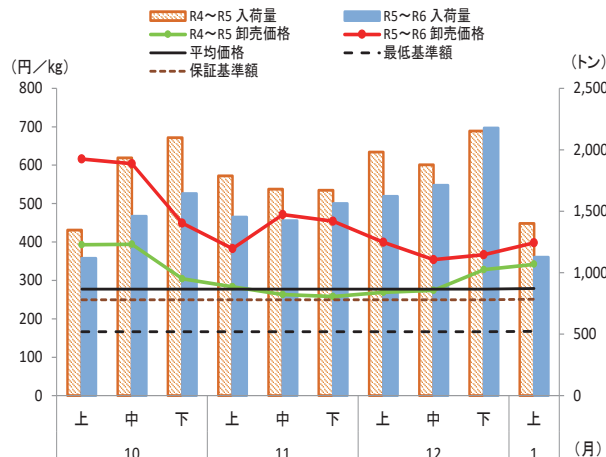


図4 ピーマンの入荷量と卸売価格の推移

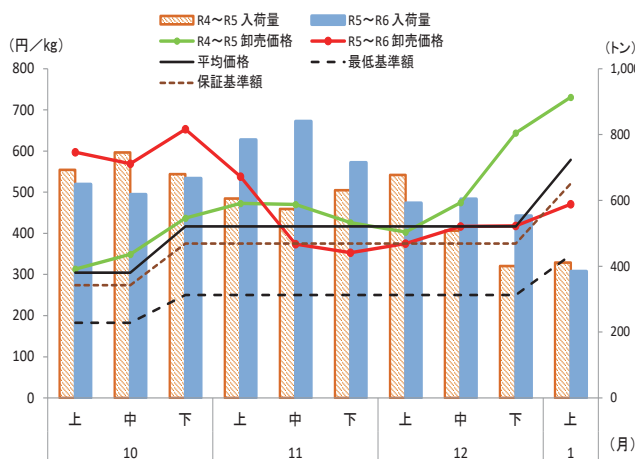
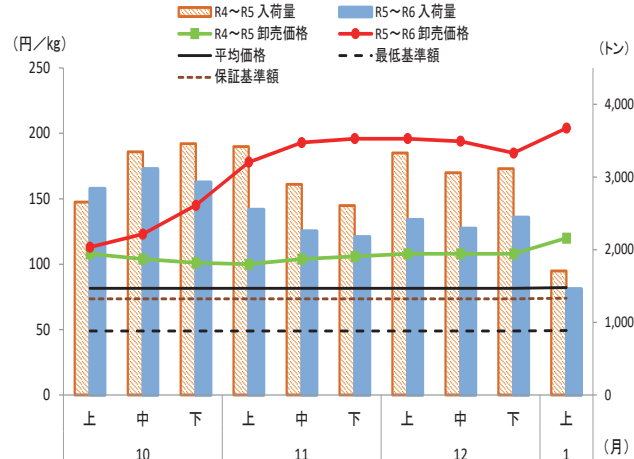


図5 たまねぎの入荷量と卸売価格の推移







資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	12月の入荷量・価格の動向
根菜類	 だいこん	千葉産を中心に神奈川産の入荷があった。千葉産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ生育は順調だがやや前進傾向であった。神奈川産の作付面積は前年並みで、10～11月にやや気温の低下があったものの、概して気温は高めに推移し日照にも恵まれている。まとまった降雨はあったものの、やや干ばつ傾向であった。総入荷量は前年、平年ともわずかに下回った。 価格は月間を通して大きな動きはなく、安めに推移した前年をやや上回り、平年を1割以上上回った。
	 にんじん	千葉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、播種期の高温・干ばつの影響によりやや遅れていたが、その後の適度な降雨と天候に恵まれて回復した。中国産の輸入が前年の2.7倍以上となった。総入荷量は前年、平年ともやや下回った。 価格は堅調な動きとなり、前年、平年とも2割近く上回った。
葉茎菜類	 はくさい	茨城産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、高温・干ばつの影響による生育遅れは回復傾向となった。総入荷量はやや少なめに推移した前年をわずかに下回り、平年をやや下回った。 価格は、下旬に向けてわずかに回復に向かい、安めに推移した前年をやや上回り、平年を1割以上上回った。
	 キャベツ類	愛知産を中心に千葉産などの入荷があった。愛知産の作付面積は前年並みで、気温が高めに推移したことにより生育は順調で大玉傾向となったが、虫害の発生が目立った。千葉産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ生育は前進傾向であった。総入荷量はやや少なかった前年をわずかに上回り、平年をわずかに下回った。 価格は下旬に向けて下がったものの、安めに推移した前年を1割以上上回り、平年を2割近く上回った。
	 ほうれんそう	群馬産を中心に茨城産などの入荷があった。群馬産の作付面積は前年並みで、11月の気温高により生育は順調も、一部病虫害が散見された。茨城産の作付面積は前年並みで、11月に入っても気温が高かったため生育は順調となった。全体に前進傾向であり、年始の出荷予定分が12月下旬に入荷している状況。総入荷量は多かった前年をかなりの程度上回り、平年を1割以上上回った。 価格は潤沢な出回りから苦戦が続き、安めに推移した前年をかなりの程度下回り、平年を1割近く下回った。
	 ねぎ	茨城産、千葉産を中心とした関東産の秋冬作の入荷となった。茨城産の作付面積は前年をやや下回り、8～9月の高温の影響により生育遅れや病虫害が目立つ。10～11月の好天によりやや回復傾向にはあったものの、夏場の高温に加えて干ばつの影響もあり、生育は遅れている。全体に太物が少なく、生育は概して良くない。総入荷量はやや多かった前年を1割近く下回り、平年をやや下回った。 価格は関東産の出荷が追い付いてきた中旬以降落ち着いたものの、それまでの高値が残る展開となり、前年、平年とも2割以上上回った。
	 レタス類	静岡産を中心に香川産、茨城産などの入荷があった。静岡産の作付面積は前年並みで、10月までの干ばつの影響がみられたものの、日中の気温が高く生育はおおむね順調であった。香川産の作付面積は前年並みで、10月以降の干ばつの影響により生育は遅延した。夜温の低下に伴い、虫害は減少傾向となった。11月中旬の降雪により今後の出荷に影響が出る可能性がある。茨城産の作付面積は前年をやや下回り、高温・干ばつの影響により遅れが散見されていたものの、その後の天候に恵まれ生育は促進されている。総入荷量は前年を1割近く下回り、平年を1割以上上回った。 価格は安めに推移した前年を2割以上上回り、平年を3割以上上回った。
果菜類	 きゅうり	宮崎産を中心に千葉産、高知産などの入荷があった。宮崎産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ生育はおおむね順調だが、一部病害の発生や、徒長や着果不良が散見された。千葉産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であるが、一部圃場で病虫害が散見された。高知産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だが、気温の乱高下から徒長気味の圃場が多い。また11月中旬からの曇雨天により病害の発生が散見された。総入荷量は少なかった前年をやや上回り、平年をわずかに下回った。 価格は、やや高めに推移した前年を1割以上下回り、平年をわずかに下回った。
	 なす	高知産中心の入荷となった。高知産の作付面積は前年並みで、日照に恵まれて生育は順調で、病害は少ないが虫害の発生が平年より多い。総入荷量はやや少なかった前年をかなりの程度上回り、平年をやや上回った。 価格は安かった前年をわずかに上回り、平年を1割近く下回った。
	 トマト	熊本産を中心に愛知産、栃木産などの入荷があった。熊本産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ生育はおおむね順調で病虫害の発生は前年並みであった。愛知産の作付面積は前年並みで、8～10月の高温の影響により回復傾向にはあるものの、一部生育が遅延傾向であった。病虫害の発生が散見されているものの全体としては少ない。栃木産の作付面積は前年並みで、越冬作はおおむね生育順調ではあるが、気温の低下と日照の減少により草勢が弱くなっている圃場が散見された。総入荷量は少なかった前年をわずかに上回り、平年をやや下回った。 価格はやや安めに推移した前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度上回った。

	 <p>ピーマン</p>	<p>宮崎産を中心に茨城産、鹿児島産、高知産などの入荷となった。宮崎産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だが、一部樹勢の低下が散見され、病害虫の発生も見られた。茨城産の作付面積は前年並みで、高温の影響による生育遅延からは回復し、おおむね順調であった。鹿児島産の作付面積は前年並みで、定植後の高温の影響により一部立ち枯れや花落ちが散見されたが、概して順調であった。高知産の作付面積は前年並みで、生育は天候に恵まれおおむね順調であった。虫害は前年並みだが病気の発生がやや多かった。総入荷量は前年を1割強上回り、平年をかなりの程度上回った。</p> <p>価格は中旬以降底上げとなったものの、高めに推移した前年を2割近く下回り、平年をわずかに下回った。</p>
土物類	 <p>さといも</p>	<p>埼玉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、収穫は順調に進んでいる。高温・干ばつの影響により灌水圃場とそうでない圃場の品質差が生じた。総入荷量はやや多かった前年を1割以上下回り、平年を1割近く下回った。</p> <p>価格はやや安めに推移した前年を2割近く上回り、平年を1割以上上回った。</p>
	 <p>ばれいしょ</p>	<p>北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、収穫は終了している。高温・干ばつの影響によりやや小玉傾向となった。品質劣化が多く、発芽が多発するなど、選果効率が低下した。総入荷量は少なかった前年をやや下回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は堅調な動きとなったものの、品質の低下もあり、安めに推移した前年をわずかに下回り、平年を1割以上下回った。</p>
	 <p>たまねぎ</p>	<p>北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、収穫は終了している。夏場の高温の影響により作柄が悪く、貯蔵量も少ない。次年度に向けやや出荷を抑えている状況である。中国産の輸入は前年の2.5倍以上となった。総入荷量は前年、平年とも2割以上下回った。</p> <p>価格は、数量不足から堅調な推移となり、前年を8割近く上回り、平年を7割以上上回った。</p>

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

### (3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万9555トン、前年同月比93.8%、

価格は1キログラム当たり234円、同111.4%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(12月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	39,555	93.8	94.1	234	111.4	114.8	227	238	236
だいこん	3,349	79.9	81.2	95	128.4	137.7	92	88	102
にんじん	2,671	100.4	96.4	145	108.2	121.5	130	144	159
はくさい	6,620	96.8	103.3	58	101.8	111.1	56	57	60
キャベツ類	4,976	101.2	104.6	78	118.2	124.6	82	83	72
ほうれんそう	592	125.7	107.1	472	101.3	100.8	503	513	416
ねぎ	1,278	94.1	95.9	490	115.8	117.9	471	461	521
レタス類	1,181	91.4	82.7	204	112.7	120.8	192	215	203
きゅうり	1,008	99.1	104.3	410	85.4	95.2	334	362	532
なす	419	96.3	113.7	398	104.5	97.3	414	392	388
トマト	1,439	103.5	105.2	401	102.0	107.3	493	423	327
ピーマン	485	134.1	120.4	399	83.0	96.9	368	408	421
さといも	278	85.6	82.2	397	132.3	117.9	327	414	433
ばれいしょ	2,707	88.8	96.4	99	94.3	79.8	106	96	92
たまねぎ	4,136	77.5	79.2	179	162.7	166.8	181	187	168

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向（大阪市中央卸売市場）

類別	品目	12月の入荷量・価格の動向
根菜類	 だいこん	鹿児島産と和歌山産が中心となり、この時期の主力である徳島産や長崎産の入荷もあった。各産地とも重量野菜の傾向であるが、作付けの減少が進んでいる。干ばつの影響により太物も少なく、入荷量は年末年始の需要に向けて月末に増量となったが、全旬を通じて少ない状況が続いた。月間では鹿児島産の入荷量は前年を大幅に下回り、和歌山産と長崎産も前年を下回った。全体でも前年、平年とも大幅に下回った。 価格は、不足感から高値推移となり、年末年始の需要期に向けて下旬に高騰した。月間では前年、平年とも大幅に上回った。
	 にんじん	長崎産と鹿児島産が主体となり、鳥取産の入荷もあった。鹿児島産は潤沢な出荷が続く、旬を追うごとに増加し、月間では前年の2倍以上となった。長崎産は、中旬の天候不順の影響により下旬の入荷量が激減し、月間でも前年をかなり下回った。正月商材である香川産の金時人参の入荷もあったが、干ばつの影響により小玉中心となり、数量は伸び悩んだ。全体としては全旬とも安定した入荷となり、月間では前年をわずかに上回り、平年をやや下回った。 価格は、安定した入荷の中でも前月までの高値の影響が残り、加えて野菜全体の高値傾向と年末年始の需要に向けて、旬を追うごとに上伸を続けた。月間では前年をかなりの程度上回り、平年を大幅に上回った。
葉茎菜類	 はくさい	茨城産を中心に、愛知産や兵庫産、和歌山産などの入荷があった。この時期の主力である茨城産と愛知産は前進傾向となったが、九州の各産地は産地出荷量が少なく、全体では前年をやや下回り、平年をやや上回った。 上旬はこの時期にしては気温が高く、量販店の店頭での売れ行きは伸び悩み、業務用の引き合いも強まらなかったが、下旬に入り気温が下がったことと、年末需要から回復傾向となって価格は上伸し、月間では前年をわずかに上回り、平年をかなり大きく上回った。
	 キャベツ類	寒玉キャベツは愛知産を中心に、大阪産などの入荷があった。春キャベツも愛知産を中心として兵庫産、和歌山産などの入荷があった。春キャベツは愛知産が暖冬の影響により前進傾向となり、入荷量は前年を上回ったが、寒玉キャベツは干ばつ傾向から肥大が悪く、大玉が少なかったことにより伸び悩んだ。キャベツ類全体では月間で前年をわずかに上回り、平年をやや上回った。 価格は、前月の高値の影響を受け、野菜全体の高値傾向にも引上げられ堅調に推移した。下旬に少し落ち着いたものの、月間では前年、平年とも大幅に上回った。
	 ほうれんそう	徳島産と福岡産が主体となる入荷であった。天候不順の影響により、各産地とも上旬から中旬にかけての産地出荷量が伸びず、月の前半は前年を下回ったが、中旬以降は回復傾向となり、旬を追うごとに増加した。月間全体では前年を大幅に上回り、平年をかなりの程度上回った。 末端の動きが鈍く価格は伸び悩み、下旬には入荷増に伴って下落した。月間では前年、平年ともわずかに上回った。
	 ねぎ（白ねぎ）	群馬産を中心に鳥取産や長野産など、この時期の主力となる産地の入荷があった。各産地とも作柄が悪く、産地出荷量が少ない中で、年末に向けての需要期に全国的に引き合いが強まったため、入荷量は全旬とも少ない状況が続いた。月間でも群馬産は前年を大幅に下回り、長野産は前年の半量以下、鳥取産も少なかった前年を下回った。月間全体では前年を大幅に下回った。 価格は、絶対量が少ない中で年末年始の需要期に向けて引き合いが強まったため、旬を追うごとに上昇し、下旬に気温が下がったことでさらに高騰した。月間では前年をかなり上回った。
	 ねぎ（青ねぎ）	徳島産を中心として高知産や香川産、近隣産地の大阪産や奈良産の入荷もあった。香川産は霜や突風の影響により倒伏が起きたところがあり、下旬の産地出荷量が激減した。徳島産は上旬までは少ない状況であったが、徐々に回復して下旬には増加したものの、月間では前年を大幅に下回った。月間全体でも前年を下回った。 末端の動きが良く、引き合いが強かったことから価格は高値推移となった。月の後半は入荷増に伴って下落したものの、月間では前年をかなり上回った。
	 レタス類	玉レタスのラップ物は兵庫産、香川産、徳島産が主体となり、裸物は長崎産を中心に九州各地からの入荷があった。全国的に干ばつ傾向で産地出荷量が少なく、入荷量が少ない状況が続いた。兵庫産の月間の入荷量は前年を大幅に下回り、徳島産は前年の3分の1以下となって月間全体でも前年を大幅に下回った。サニーレタスは福岡産が中心となり、順調な出荷が続いてクリスマスや年末年始の需要から荷動きも良好で、下旬に入荷増となった。月間でも前年をかなり上回った。リーフレタスも福岡産が中心となり順調な入荷が続く、旬を追うごとに入荷増となり、月間でも前年を上回った。レタス類全体では玉レタスの不振から前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に下回った。 価格は、玉レタスのラップ物の絶対量不足により高値推移となり、業務用向けの裸レタスも上旬は前年を大きく上回って推移した。サニーレタスとリーフレタスは安定推移で、需要期に向けて旬を追うごとに微増傾向となった。レタス類全体では前年をかなり大きく上回り、平年を大幅に上回った。

果菜類	きゅうり 	<p>宮崎産を中心に高知産などの入荷もあった。暖冬の影響もあり生育は順調で安定した出荷を続けた。月間全体では前年をわずかに下回り、平年をやや上回った。</p> <p>量販店の特売需要が少なく引き合いが強まらなかったため、販売は苦戦し安値推移となった。年末年始の需要期に合わせて下旬に上伸したが、月間では前年をかなり大きく下回り、平年をやや下回った。</p>
	なす 	<p>千両系は高知産を中心に岡山産などの入荷があった。長なすは福岡産と熊本産が主体となる入荷であった。上中旬は比較的安定した入荷であったが、下旬に急な気温低下があり入荷量が減少した。千両系は月間では前年を下回ったが、長なすは大幅に上回った。なす全体では前年をやや下回り、平年をかなり大きく上回った。</p> <p>季節的に需要は強くない中で、価格は旬を追うごとに下落傾向であったが、野菜全体の品不足感による単価高と年末需要の影響により堅調な推移となり、月間では前年をやや上回り、平年をわずかに下回った。</p>
	トマト 	<p>愛知産と熊本産が主体となる入荷であった。産地出荷量が伸び悩む中で、クリスマスや年末年始の需要に向けて下旬に入荷が集中した。月間全体では前年、平年ともやや上回った。</p> <p>価格は月の前半は不足感から高値となるも、旬を追うごとに下落傾向となった。しかし、クリスマスや年末年始の需要に助けられて下げ止まり、月間では前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	ピーマン 	<p>宮崎産と高知産が主体となる入荷であった。暖冬の影響もあり各産地とも順調な出荷が続き、全旬とも潤沢な入荷となった。月間全体では前年、平年とも大幅に上回った。</p> <p>需要は少なく販売に苦戦し、価格は年末需要に向けて旬を追うごとに上伸はしたものの、月間では前年を大幅に下回り、平年をやや下回った。</p>
土物類	さといも 	<p>愛媛産を中心に、正月需要に向けて各地からの入荷や、海老芋など季節商材の入荷もあった。正月用の需要は平年並みであったが、作柄が悪く産地出荷量が伸びなかったため、旬を追うごとに入荷増となるも、月間では前年をかなり大きく下回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>価格は、入荷量が少なく引き合いが強まったこともあって高騰し、年末に向けて旬を追うごとに上伸を続けた。月間では前年、平年とも大幅に上回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>丸芋は北海道産と、長崎産の新物が主体となる入荷であった。北海道産は産地残量からの出荷となり、終盤に向けて旬を追うごとに減少して月間でも前年を大幅に下回った。長崎産は暖冬の影響もあり前進気味で、順調な入荷を続けて前年を大幅に上回ったが、全体では前年をかなり下回った。メークインは北海道産の産地残量からの出荷で、旬を追うごとに減少し、不安定な入荷となって月間では前年をかなり下回った。ばれいしょ全体では前年をかなり大きく下回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は、丸芋、メークインともに発芽などの品質面の問題もあり、引き合いが弱く安値推移となった。全体でも旬を追うごとに下落傾向となり、月間では安値であった前年をやや下回り、平年を大幅に下回った。</p>
	たまねぎ 	<p>北海道産と兵庫産が主体となる入荷であった。北海道産は不作や棚持ちの悪さから産地残量が少なく、前年の半分以下に留まった。兵庫産は順調な入荷が続いたが、全体としては量が少なく、月間では前年、平年とも大幅に下回った。</p> <p>絶対量不足から価格は高騰し、高値推移となった。月間では前年、平年とも大幅に上回り、1.5倍以上の価格となった。</p>

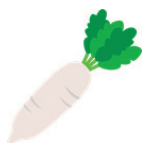
(執筆者：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

#### (4) 首都圏の需要を中心とした2月の見直し

10月以降、全国的に気温高で推移したことにより、重量野菜を中心に大幅に生育が前進して収穫が追いつかない状況が続いている。年内の在庫が完全にはけなかったため、年明けに果菜類を中心に価格は大幅に下がった。「クリスマスや正月商材の消費が以前ほどない。」との小売商の声もあった。

2月は、各産地、各品目とも潤沢な出荷を維持し、平年並みかやや下回る価格になると予想される。

#### 根菜類



だいこんは、千葉産はキャベツと同様に1カ月程度前進している。トンネル物も例年より早く、1月下旬には出荷が揃い、2月は前年を上回る出荷が予想される。Lサイズ中心で、2Lも増えると予想している。徳島産の生育は順調で、早めに出荷が始まり12月下旬にピークとなった。年明けは年末よりも減るが、2月中旬まではまとまった量が出荷され、前進の影響により2月としては平年を下回ると予想される。2Lサイズ中心で、肥大は問題ない。神奈川産は11月のまとまった降雨の影響により大幅に前進した。年末年始の高温によりさらに前進する懸念が残る。2月までは年内と同様2Lサイズを中心に順調に出荷されると予想される。静岡産の出荷のピークは1月中下旬から2月中旬までで、現状はやや遅れている。作付けは前年並みで、サイズは2L中心と予想される。

にんじんは、千葉産は霜が降りていないこともあり、収穫作業が進んで2週間ほど前進しており、出荷は2月いっぱいではほぼ終了すると予想される。2月としては例年の80%程度の出荷と予想される。肥大も問題なく、引き続き2Lサイズ中心と予想される。徳島産の出荷は3月に入ってからで、ピークは中旬からと予想される。初期の干ばつで蒔き直しした部分もあるが、現状はほぼ平年並みの状況である。6月中旬まで出荷できると予想される。



#### 葉茎菜類

キャベツは、愛知産の生育は順調で、2～3週間の前進となっている。後続の作も前進しており、出荷の谷間は生じない見込みである。大きさは8玉サイズで、1月に続き2月の出荷も前年を上回るが、天候では少々干ばつ気味である。千葉産の現状は順調で、豊作となっている。1月に入り気温が下がれば出荷は一旦減り、2月には再び増えると予想している。神奈川産は乾燥が続いたが、11月の降雨により前進傾向となっている。豊作基調で品質も良く、引き続き2月も問題なく潤沢な出荷と予想される。

はくさいは、茨城産は春作の準備のため12月下旬に入り少なめとなった。11月に急増した影響により価格が低迷し、12月に入って出荷調整を行った。圃場に十分残っているため1～2月は問題なく出荷できるが、2～3月の切り上がりは例年より早めと予想している。兵庫産は9月下旬から10月上旬に定植したため、特別猛暑の影響はない。12月に出荷が始まり下旬にピークとなり、1月中旬まで続いて2月10日頃まで多い見込みである。冷蔵品の出荷は3月20日頃まで。4玉サイズを中心に、作付けは平年並みである。

ほうれんそうは、埼玉産の生育は順調で前進している。1月中下旬に少なくなり、2月に入り前年並みに追いつくと予想している。栃木産の現状はほぼ平年並みで、1月後半から2月も天候が安定すれば順調な出荷と予想される。作付けの減少はあるものの、量的には前年並みと予想される。「縮みほうれんそう」は播種後、10～12月が高温傾向だったことにより正品率が低く、当面少ない予想である。

ねぎは、茨城産は12月から平年並みの出荷に回復し、引き続き2～3月も潤沢な出荷ペースを維持できると予想される。Lサイズ中心でやや細めである。千葉産は遅れていたが、12月には回復し、2月も例年通りの出荷と予想している。肥大はあまり順調でなく、やや細めと予想される。3月は春ねぎの出荷が始まるため量的に減るのは4月に入ってからと予想される。

レタスは、静岡産は1月に続き2月も順調な



出荷が続き、下旬はシーズンの終盤に近付くため減少すると予想される。適度な雨があるため生育環境は良い。長崎産は12月下旬の寒波による降雪や寒害もなく順調である。年明けに増えて1月下旬から減少する例年並みの展開と予想される。2月に入りやや前倒し気味となり、3Lの12玉サイズ中心と予想される。茨城産はトンネル物で、例年より1旬以上前進し、2月に入り活発に出回ると予想している。ただ全般に干ばつ気味で、その分の前進は抑えられると予想される。

## 果菜類



きゅうりは、高知産が年末に出荷のピークとなったが、暖冬の影響もあって1~2月もそのままピークが続くと予想している。今年も寒暖差が大きいため、出荷の変動はありと予想される。積雪の影響によりかなり少ない時期があった前年を上回ると予想している。群馬産は寒波の影響もなく生育は順調で、2月に入り量的にまとまってくると予想される。全生産者の出荷が揃うのは3月の初めから。

なすは、岡山産は11月にピークが来てその後の寒さで減少している。作付面積は若干減少しているが、生育は順調で、単収が上がって量的には前年並みの出荷となっている。1月に少なくなり、3月には日照が増えて出荷も増加し始めると予想される。最大のピークは5月で、品種は例年と同様の「千両」である。福岡産は年内の成り疲れにより年明けの出荷は減少した。1月末頃から再び増え始めて4~5月が最大のピークと予想される。年内の出荷は前年を上回り、樹勢は良好である。

トマトは、熊本産の12月は生育の遅れにより平年より少なかった。その分、年明けが多くなり、2月中下旬は着花が良くないこともあり平年を下回る可能性もある。天候に特別問題がないことから、全体的には平年並みの展開を予想している。M・Lサイズ中心で、品質は充実している。愛知産は促成物で植え替えの時期となるため1~3月の出荷量は少ないが、量的は平年並みの見込みである。ミニトマトは1月初め頃に大きなピークが来て、その後は平年並みに少なくな

ってくる。この後の最大のピークは4~5月と予想される。佐賀産の「光樹とまと」は例年と同様1月13日からのスタートである。当面のピークは3~4月で、2月は増えながら推移すると予想される。作付けは前年並みである。

ピーマンは、茨城産は2月1日から半促成物の春ピーマンの出荷が始まるが、現状の苗の状況は進んでいる。量的には期待できるが、作付面積の減少と作が後ろにずれていることから、前年を上回ることにはないと予想している。高知産の現状は出荷の山谷の発生もなく、順調に推移している。天候が安定していることから病気の発生もない。2~3月は徐々に増えながら例年と同様のペースで推移すると予想される。鹿児島産の現状は天候が良すぎたことや激しい寒暖差により成り疲れや病害が見られる。そのため1~2月はやや少なく、2月後半には増えてくると予想される。

## 土物類



さといもは、愛媛産の「女早生」は夏の高湿・干ばつにより2023年産は例年の80%と少なかった。年内は前年並みに出荷し、現状の残量は少なく、4月初め頃まで前年の60%程度の出荷と予想される。Lサイズ中心である。

ばれいしょは、北海道産の2023年は豊作年であった。市場出荷は2月いっぱい以前年を上回る出荷と予想され、3月は加工向けのみとなる。引き続き2L・Lサイズ中心である。鹿児島産は種いもの入手が遅れたことにより植え付けが例年より2週間程度遅れた。その影響により出荷は1月末からと予想している。出荷のピークは3月の初め頃で、2月は例年より少なめを予想している。出荷は4月いっぱい以前を予想している。

たまねぎは、北海道産（きたみらい）の2021年は不作、22年は豊作気味と平年値が難しいが、現状は平年より少なめの出荷となっている。23年の収穫量は前年の91%となっている。貯蔵庫の規模が変わらないため、年明けは平年と同様の出荷と予想される。中心サイズはL大・Lである。北海道産（岩見沢）の現状は平年並みの出荷となっているが、年明けは減

少し3月下旬で切り上がると予想される。1～2月は前年の80～90%で、サイズはL中心であるがMも多い見込みである。静岡産の黄たまねぎは1月初めから2月が出荷のピークと予想される。白たまねぎは2月に入ってかなり少なくなると予想される。1月の出荷が前進気味になると、3月はかなり減少すると予想している。熊本産の葉付きたまねぎは例年通り1月下旬から始まると予想される。2月にピークとなり、同月末頃に終了すると予想される。3月は通常のだまねぎの出荷となるが、生育は順調である。葉付きたまねぎは不作気味であった前年を上回ると予想される。



## その他

ブロッコリーは、愛知産は12月下旬の冷え込みにより一時少なくなったが、生育は順調で、1～2月まで引き続きピークが続き、3月に減少すると予想される。

アスパラガスは、佐賀産のハウス物は2月に入って本格的にスタートすると予想している。ピーク時に比べると作付面積は減り、さらに株も古くなり単収は落ちている。当面の春のピークは2月の終わり頃から3月初めにかけてで、夏のピークは6月下旬から7月である。

かんしょは、徳島産は収穫の遅れから少なめの出荷であったが、12月から平年並みに回復した。1～3月は徐々に減ると予想される。千葉産の品種は「紅はるか」「紅あずま」で、貯蔵物で例年並みの出荷と予想される。夏の干ばつの影響はなく、品質も例年と同様で問題ない。

ながいもは、北海道産は豊作で、例年より長いサイズに仕上がっている。そのため収穫時に折れやすく、カット品などのB品が多くなっている。気温高により例年より粘りが少ない。収量は平年より10～20%多い見込み。

ごぼうは、宮崎産の新ごぼうは11月から始まって現状ピークで、2月に入り徐々に減り、3月にはさらに少なくなると予想される。現状

は例年を上回る出荷になっているが、病気の発生もなく自然災害もない。出荷形態は150グラム袋の1本入り、200グラム袋は2～10本入りの二つで、いずれも洗いごぼうである。

かぼちゃは、沖縄産は若干遅れてはいるが、1月下旬から出荷が始まると予想される。生育は順調で、県外へは週1回ペースで出荷が始まる。出揃うのは3～4月で2月は徐々に増えながら推移すると予想される。品種は「えびす」と「栗五郎」である。輸入のニュージーランド産は2～5月まで大きな問題もなく順調に入荷すると予想している。前年はハリケーンの影響で少なかった。品種は日本の消費者にも馴染みのある「えびす」中心である。

きぬさやえんどうは、沖縄産は10～11月の高温の影響により遅れているが、不作だった前年より順調で、2月は前年を上回る出荷と予想され、ピークは3月中旬である。

スナップえんどうは、鹿児島産は例年12月から2月までは横ばいで推移するが、寒波の影響もなく引き続き順調である。

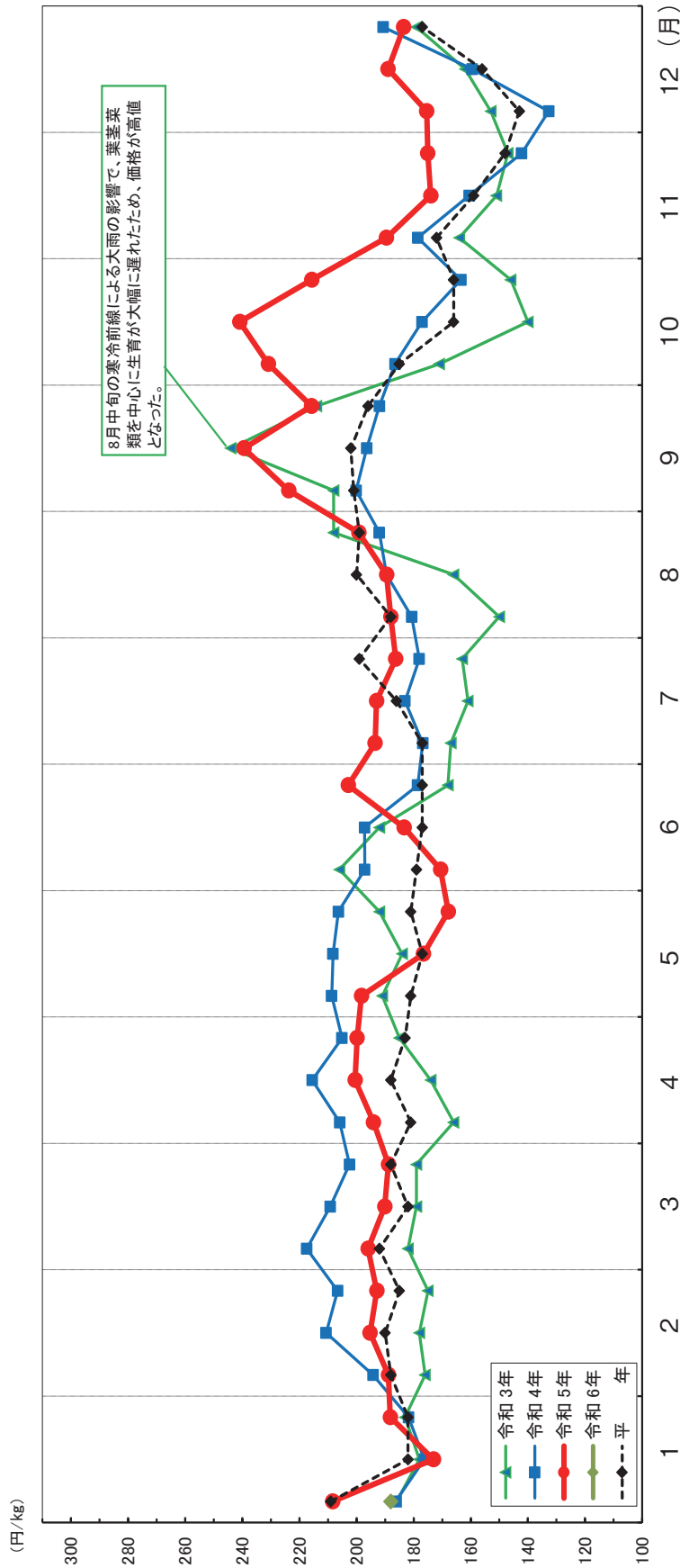
そらまめは、鹿児島産の1～2月は順調で横ばいで推移し、3月に入り少なくなってくると予想される。

たけのこは、福岡産の「合(お)馬(うま)の筍」は表年ではあるが、年内の出荷は例年より少なかった。雨が少なく肥大が悪かったためだが、3～4月には回復すると予想される。大阪と京都市場への出荷であり、鮮度重視のため朝採りした同日深夜市場着の出荷体制となっている。

ナバナは、千葉産は12月中旬まで続いた高温により2週間程度の前進となっている。年明けに少なくなる可能性もあるが、基本的に生育は順調であり、3月の節句の時期の出荷に向けて増加すると予想される。

(執筆者：千葉県立農業大学校  
講師 加藤 宏一)

## (参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)



(単位：円/kg)

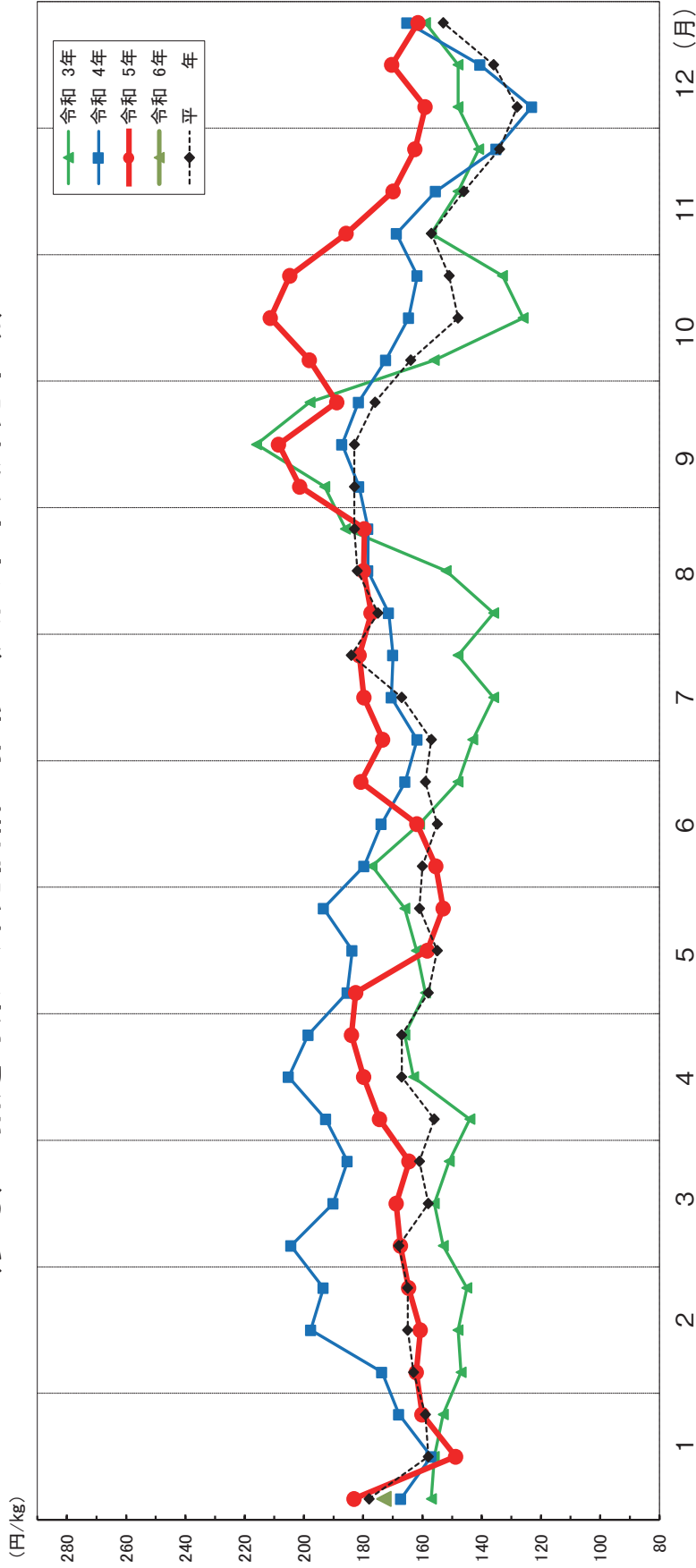
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月																			
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬																		
令和3年	186	178	183	176	178	175	182	179	179	166	174	185	191	184	192	206	192	206	192	168	167	161	163	150	166	208	208	244	214	171	140	146	164	151	147	153	162	179				
令和4年	186	176	182	194	211	207	217	209	202	206	216	205	209	208	206	197	197	179	177	183	178	181	189	192	181	189	192	200	196	192	187	177	163	179	161	142	133	160	191			
令和5年	208	173	188	189	195	193	196	190	189	194	200	200	198	177	168	171	183	203	194	193	186	188	189	199	224	239	216	231	241	216	190	174	175	175	189	184						
令和6年	188																																									
平年	209	182	182	188	190	185	192	182	188	181	188	183	181	177	181	179	177	177	186	199	188	200	199	201	202	196	185	166	166	172	159	148	143	156	177							

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5カ年（平成30年～令和4年）の旬別価格の平均値である。

注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の4市場のデータである。

## (参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月														
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬													
令和3年	157	156	153	147	148	145	153	156	151	144	163	166	177	161	148	143	136	148	136	152	186	193	216	198	156	126	133	157	148	141	148	148	159				
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169	156	135	123	141	165	
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173	180	181	177	180	180	201	209	189	198	211	205	186	170	162	159	170	161	
令和6年	173																																				
平年	178	158	159	163	165	165	168	158	161	156	167	167	158	155	161	160	155	159	157	167	184	175	182	183	183	183	176	164	148	151	157	146	134	128	136	153	

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5カ年（平成30年～令和4年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。